

## 知的障害児にとって意義のある交流及び共同学習のあり方

企画者	原 洋平（信州大学学術研究院教育学系） 下山真衣（信州大学学術研究院教育学系）
司会者	原 洋平（信州大学学術研究院教育学系）
話題提供者	小林 愛（信州大学教育学部附属特別支援学校） 平方素樹（信州大学教育学部附属特別支援学校）
指定討論者	大石幸二（立教大学現代心理学部）

KEY WORDS: 知的障害・交流及び共同学習・日常的な交流

### 【企画趣旨】

2019 年 3 月に改訂された交流及び共同学習ガイドの中では、障害のある子供と障害のない子供、あるいは地域の障害のある人が触れ合い、共に活動する交流及び共同学習は、障害のある子供にとっても、障害のない子供にとっても、経験を深め、社会性を養い、豊かな人間性を育むとともに、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となるなど、大きな意義を有するものであると述べられている（文部科学省，2019）。

信州大学教育学部附属特別支援学校（知的障害）の小学部では、同じ敷地内にある附属長野小学校（以下、長野小）の児童と行事や生活単元学習の時間などを通して、継続的に交流を深めてきている。これまで時間的な制約や負担などがあり、どうしても単発のイベントやその場限りの活動になってしまうという課題を踏まえて、双方が休み時間に気軽に立ち寄り、共に活動するという交流を進めてきた。

本シンポジウムでは、小学部と長野小児童との交流及び共同学習の実践の成果と課題について報告し、知的障害児にとって意義のある交流及び共同学習のあり方について検討を行う。

なお、研究倫理上の配慮として、事前に保護者と学校管理職に研究と個人情報保護について説明を行い、研究参加と公表について承諾を得た。

### 【話題提供①】「友達になりたい」

小林 愛（信州大学教育学部附属特別支援学校 小学部）

長野小との交流では「友達になる」をテーマに掲げ、交流の在り方を検討した。本シンポジウムでは、小学部児童が期待感をもって交流に参加し、ペアの友達とのかかわりを深めていった事例を取り上げる。これまでの単発的な交流では、小学部児童の目的意識や交流するペアの友達に対する相手意識がなかなか高まらないという課題があった。そこで、総合的な学習の時間に障害者との交流について学習していた交流学級の学級担任と連携し、行事的な交流ではなく、より日常的な交流を目指して検討を重ねた。長野小児童の「友達になりたい」「普通の友達と何が違うんだろう」という願いや問いから、小学部の昼休みを交流の時間とし、体育館や中庭、ブレイルームなどでそれぞれが自由に遊ぶことを継続して実施した。

すると、小学部児童は昼休みにペアの友達が来ることを期待して窓を見る、自分から遊びたいことを伝えてかかわろうとする、名前を呼び合って遊ぶなど相手を意識して交流を深めることができた。また、長野小児童は小学校卒業時に、「これからずっとかかわっていききたい」「大人になってもずっと考えていく」と話していた。

日常的な交流を通して見られた子どもたちの姿を基に、知的障害児にとって意義のある交流および共同学習を運営する際の視点やあり方について協議したい。

### 【話題提供②】「ひるやすみ、こうりゅう、たのしみ」

平方素樹（信州大学教育学部附属特別支援学校 小学部）

小学部の A さん（知的障害・自閉スペクトラム症）が日常的な交流を通して、長野小児童とのかかわりを重ねることにより、交流が A さんにとって安心できる時間となっていく事例を取り上げる。以前は、年間で 3 回程度実施し、それぞれ活動内容が異なっていた。年間を通して同じ友達と活動しても、行事のように急に現れることにより、活動へ見通しがもてず大きな声を出して泣くという様子が見られた。そのため、交流の日は、いつも不安定であった。

毎日昼休みに長野小児童と交流するようになると、A さんから、「ひるやすみ、こうりゅう、たのしみ」と友達に会えることへの期待感を言葉で伝えることが増えた。また、教室に友達が来ると、笑顔になり、肩を上下させながら、「ううう」と笑い声を出すといった様子が見られた。

最初は不安な気持ちで一緒に遊んでいた A さんのペアの長野小児童も、一緒に遊ぶ時間を重ねたことにより、A さんの姿を受容的に受け止め、共感的なかわりができるようになっていった。このことが、A さんにとっての交流が一日の中の安心・安全に過ごせる時間となることにつながったと考える。A さんの姿の変容から、一日の生活の中に位置づいた交流の意義について協議したい。

### 【指定討論者の趣旨】

大石幸二（立教大学現代心理学部）

Friend & Bursuck (1996) は、障害のある児童とない児童が自然に社会関係を築き、これを長く維持し発展させるには、双方が、(1) 具体的な相互作用の機会を提供されること、(2) 支援行動や交友スキルを身につける学習に恵まれること、(3) 役割モデルや社会的に望ましいモデルとの接触経験を積むこと、をプログラムすることが必要条件だと指摘している。

小林愛氏の話題提供では、特別支援学校の児童と小学校の児童がペアを組み、活動を共にする実践は“Circle of Friends” (Snow & Forest, 1987) の技法である。新たに出会う他者との社会関係を築く場合に有効で、関わる相手が明確になり、共通の目標達成が目指されるときに、活動参加が促進される。平方素樹氏の話題提供では、昼休みに毎日交流機会を設定したことで、障害のある児童に「期待」が、障害のない児童に「共感」が芽生えた。Eichinger (1990) も週に 2 回（1 回 30 分）の交流継続により、共有感覚と肯定的感情を高めた。

討論では、①支援（中期）・指導計画への位置づけ、②教師の関与と評価、③小学校との連携などについて問い掛けたい。

### 【文献】

文部科学省（2019）交流及び共同学習ガイド

(HARA Yohei, SHIMOYAMA Mae, KOBAYASHI Ai, HIRAKATA Motoki, OISHI Kouji)